〈新刊紹介〉

超訳方丈記を読む

松田　存

タイトルはそのまま書名である。

今年（平成二十四年二〇一二）は、太安万呂（？～七二三）による『古事記』成立千三百年（和銅五年七一二）、鴨長明（一一五五～一二一六）の『方丈記』八百年（建暦二年一二一二）という節目の年で、ゆかりの彼地や各機関で数々のイベントが催された。

そうしたことから、前者では、さる十一月初めには、出雲大社で新作能が奉納されるということで、その解説をかねて出向、身近にそれを感じた次第である。後者でも、殊にこれに関係する刊行物が相次ぎ、八月には、小林保治氏の『超訳方丈記を読む』が出版された（新人物往来社）。そして執筆者全七名のうち、本学の磯水絵教授が寄稿していることから、本欄に取り上げることにした次第である。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」に始まる『方丈記』は、全文八千六百文字余り四百字二二枚程度の分量であるが、その内容は、そのまま中世の無常感を底流せしめる内容となっている。とりわけ安元三年（一一七七）四月の大火、治承四年（一一八〇）四月の辻風、養和元年（一一八一）の飢饉、元暦元年（一一八四）七月の大地震等の天災（五大災厄）は、現平成二十三年（二〇一一）三月の東日本大地震津波放射能等大災害を連想させることでもある。そして「三界は、只心一つなり」と生死流転の挙句、方丈の草庵での往生を願う長明の『方丈記』を十四項にして超訳を試みている。第一章がまさにそれで、第二章が『方丈記』と「現代」、第三章『方丈記』鑑賞の壷、第四章鴨長明とその時代、第五章の数寄を求めた鴨長明の「管弦道に夢中になる気持ちの切実さ」に迫るのが筆者磯教授である。

○「数寄者」長明はどのように形成されたのか
○三十年にわたり長明を導いた琵琶の師中原有安
○庵に持ち込んだ箏と琵琶
○演奏者長明の実力とは
○事件は妄執を断つ営みだったか。「秘曲尽くし」事件の顛末

の五項目を挙げて説いている。長明が方丈の庵に琵琶・琴を持ち込んでいたのは本文からも事実であるが、幼少からこれに親しんでいた経緯が細かく、その音楽的感性とともに傍証されている。

◇

追って十二月十五日（土）午後、（三島）中洲記念講堂において、「今日は一日、方丈記―鴨長明の「心」を読む―」と題する『方丈記』成立八〇〇年記念シンポジウム&コンサートが開催された。第一部は『方丈記』斉読、第二部は九名の関係教員による『方丈記』講座で、かなりグローバルな視点からの『方丈記』論が展開された。

黄昏に及んでの第三部こそ当日の画期的なイベントで、『文机談』にみえる秘曲を聴く「秘曲尽くし」再現であった。